

1. 授業の概要

「住居学」は2回生対象で後学期の開講科目である。家政教育専修にあつては必修科目、生活環境コースにあつては選択Aの位置づけとなる。今年度は例年に比べて受講者が多く、登録者数は40名近くに上った。但し、最後まで受講できた学生は30名強に止まった。

授業は、テキストとして「豊かな住生活を考える 住居学」(小澤紀美子編 彰国社)を使用している。以前は筆者らで出版した「現代の住まい 基礎住居学」(住田昌二編 光生館)をサブテキストとして案内しながら進めてきたがやや「現代」と離れつつあり、変更したものである。住居学の狙いを復習すると、一つに、住宅・住生活・住環境を取り巻く諸事象を実体的にとらえ、具体的に考えること、二つに対象を常に多面的総合的にとらえることであり、それは住宅・住生活・住環境を構成する要素が多様であり、複雑に絡み合っているからにはかならない。それを解きほぐすことが大きな課題でもある。

15回の授業は、講義、紙ぶるる作成(住宅耐震性教材)、実験調査などである。さらに今期の最終回は学内で行われた講演の聴講も加えられ、それも受講生には刺激的であったようだ(後述)。

2. 受講生のアンケート結果

授業の最終回に当たって、簡単なアンケート調査を行った。回収数は31である。

- ・授業全体の理解について
 - よく分かった：19 (61.3%)
 - 普通：12 (38.7%)
 - ・授業(含む資料等)のヴォリューム
 - 多い：5 (16.1%)
 - 普通：26 (83.9%)
 - ・配付資料の適切性
 - とても適切：16 (51.6%)
 - 普通：15 (48.4%)
- これらに加えて、自由意見を記述してもらった。

授業全体の理解度については、61.3%が「よく分かった」としている。この数値は昨年の調査(「よく理解できた」19%)と比べて大幅に上昇している。考えられる要因の一つは、例年に比し、受講生の顔を見ながらだが内容を精選し、若干減らしたことも影響しており、その分、少しだけだが丁寧に伝えられたのかもしれない。

授業のヴォリュームについては、16.1%が「多い」とした。昨年の比率が23.8%であるから、数値の上ではやや減少したと言える。上述の理解度の数値が上がっている分、良しとせざるを得ない。

配付資料の適切性(内容及びヴォリューム)は、51.6%が「とても適切」、48.4%が「普通」と答えている。昨年は量的なものとして尋ねた時、「多すぎる」とした受講生が95.2%に上り、説明不足や未消化に終わったことを考えると、今年度は資料説明も気をつけて行ったお陰で不満が少し減り、反省点がやや生かされたと言えそうだ。住居学の各分野は幅広く、それらを詳しく述べるには時間不足もあり、資料等による説明及び自学自習で補わざるを得ず、つついあれもこれもと欲張ることが多いが、先の反省点を踏まえ、次年度も精選に努め、またしっかり不足を補いたい。

3. 実践的学習の一コマ

設備に関しての住宅の照度や、構造に関連しての住宅の耐震性については、座学だけでは理解しにくく、計測器や模型づくりを導入した実践的なものとしている。

照度は、照度計を使って校舎の各部分や教室の各箇所の明るさを、複数人数で授業時間中に計測して、明るさはエネルギーの一つであるため、数字として反映できること、またJIS規格の照度基準が設けられており、目に良く作業環境に適した明るさを保つことの必要性が理解できる。

住宅の耐震性の学習では、昨年に引き続いて「紙ぶるる」による作業—住宅の耐震化の効用（主として筋交いの役割）を紙模型で計る—を設けた。東日本大震災をはじめとして近年の大地震とその災害の有り様をスライドで示した後、「紙ぶるる」作業に入る。市販のもので安価で入手でき、今回は別の催しの残部を学生各人に配布し、受講生はマニュアルと格闘しながら製作した。

昨年の積み重ねとしての受講生の声の幾つかを以下に掲載する。

- ・筋交いの効果について簡単に理解でき適切である。もう少し作り方が簡単であればさらに良いと思う。
- ・目に見える形で住宅の耐震構造について学ぶことができたのはとても有意義。
- ・実際に自分で作るので視覚的に分かり易い。
- ・地震国日本で多い木造建築も「紙ぶるる」のように耐震性を上げるのは重要と実感。
- ・実際に揺れを確認することができたので、記憶にしっかり残り良かった。
- ・実際の住宅の構造を見る機会はないので、簡単に理解できる手頃な教材として有効。
- ・短時間に簡単に製作でき、また様々なパターンで実験でき、とても良かった。
- ・筋交いの機能が可視化され、理解しやすかった。自分の家についても検討したい。
- ・筋交いの設置場所や本数の違いによって耐震性がどのように変化するか実感できた。
- ・屋根が重いと揺れが大きいということや、筋交い補強すると揺れが弱まることを視覚的によく理解できる教材と感じた。

受講生には概ね好評であり、なおかつ理解しやすいことが多くから示されている。年末の後期の折り返し地点近くになった頃、この作業は住居学が「実践的学問」であることを確認する良い機会ともなっている。

さらに、発展的に牛乳パックを活用した簡易な自前の耐震性確認のための模型づくりへと進めることも、3回生後期の家庭科教育法関連授業で只今試行中である。

4. 新聞記事を活用した自学自習

住居学では新聞記事を活用した宿題を3回ほど課している。3回は多いか少ないか分からないが、嘗ては2週に1回、そして1ヶ月に1回を経て、とうとう3回に減ってしまった。新聞を購読していない学生が多いことが

主要因だが、最近のネット情報はともかくも、関連記事を探し、文字をじっくり読むことは住居学の学習に限っても欠かせない。

ピックアップする記事は住宅・住生活・住環境、或いは生活問題など、生活科学からその分科学としての住居学に関連する話題ならば何でも良いことにしている。第1回目の宿題には結構手こずるも、2回目からは情報—テキスト、授業中の話題ほか—をヒントにバラエティに富んだものが出てくる。実際、原発問題や避難所生活のあり方、地域の美術館構想、ゴミ問題やPM2.5問題など、取り上げられる内容は結構幅広い。受講生の中には、課題を設定して連続物としてレポートする受講生もおり、時折読み応えのある報告が手元に届く。宣伝文句の「就職にも役立つはず」という枠を越えて、誠実に提出する学生も目立つ。社会の窓としての新聞を活用したこの宿題は来年度までは必ず続けるつもりである。

4. 学内講演会の受講に関連して—藻谷浩介「里山のチカラ」—

最後の授業は、都合良く授業時間と合致したため、筆者も連れだって南加ホールでの受講とした。10時から12時過ぎの講演は一般市民が多く参加し、演者の身振り手振りのパフォーマンスに加え、フローアと一体化するための色々な仕掛けが学生にもよく受けたようである。

またその中身も、自然と生きるシステムとしての里山生活（里山資本主義と呼称）の具体的方法に加え、そこでの住宅のあり方としての木造建築の新技术開発に伴う、新しい住まい・建築づくりにも触れられ、授業で補えなかった大事なことが多く伝えられた。

学生からは、「里山資本主義について学ぶ中で、資源を有効に活用することが、エコや地域振興だけではなく、安心安全な供給につながるということが理解できた」「木を使うことの大切さを知りました。木造建築は燃えやすいと思っていましたが、作り方によっては燃えにくく、耐震性のある住宅・建築を造ることができることが分かりました」などの感想があり、一般市民と一緒にあっての聴講は、偶々であるが貴重なものとなったと思われる。